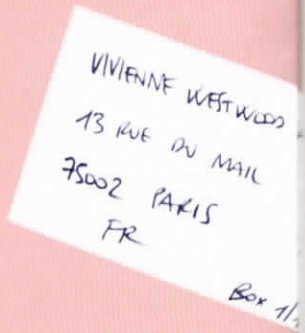


# WESTWOOD



## REVIEW

BY KAORI NAKANO

ヴィヴィアン・ウエストウッドという人物の存在、  
生き方そのものに魅了される。

中野香織 (服飾史家)

ヴィヴィアン・ウエストウッドって知ってる? と20代前後の日本の大学生に聞くと、「お財布のブランド」あるいは「マンガの『NANA』に出てくるブランド」と即答されることが多い。王冠と地球をモチーフにしたオーブのマークも、広く認知されている。だが、肝心のデザイナー本人に関しては、意外と知られていないのである。「人の名前だとは知らなかった」と驚かれることも少なくない。

こうした世代のために少し説明を加えると、今年77歳を迎えたヴィヴィアン・ウエストウッドは、ファッションデザイナーであり、独立した会社の所有者にして経営者であり、時代を挑発する活動家であり、情熱的で率直なパーソナリティで人々の注目を浴び続ける英国文化のアイコンであり、それらすべてを兼ね備えるゆえにイギリスファッション界の女王として君臨する、類まれなる女性である。

このたび、ヴィヴィアン・ウエストウッドの最新ドキュメンタリー、『ヴィヴィアン・ウエストウッド 最強のエレガンス』が公開されるが、これは監督のローナ・タッカーが3年以上にわたりヴィヴィアンの生活のあらゆる面に密着して撮りあげた力作で、過去2本のヴィヴィアンに関するドキュメンタリーをはるかに凌駕する濃密な作品になっている。

彼女の名が初めて世界にとどろいたのは、1970年代。当時のパートナー(二度目の夫)、マルコム・マクラレンとともにロンドンのキングスロードからバンクムーブメントを起こした。挑発的なメッセージTシャツに安全ピン、チェーンや鋸を多用した装飾、攻撃的なヘアメイクなど、ヴィヴィアンが創るバンクスタイルは時代の象徴となる。マルコ

ムがプロデュースしたバンド「セックス・ピストルズ」も、過激さゆえに放送禁止になり、放送禁止ゆえにヒットチャートの上位に輝いた。その結果、彼女は「バンクの女王」と異名をとる。ちなみに、それ以前のヴィヴィアンは、夫、子供と暮らす美術教師だった。彼女の姓「ウエストウッド」は、最初の夫との結婚で得た姓である。ついでながら、最初の夫との間に生まれたベン・ウエストウッドは現在、エロティカの写真家であり、マルコムとの間に生まれたジョー・コーレは、セクシーなランジェリーブランド「エージェント・プロヴォケーター」の創業者である。

1980年代、バンクも商業主義に取り込まれて観光絵葉書のモチーフとなり、マルコムとの関係を解消してからは、ヴィヴィアンは歴史に着想を得た本格的な服作りに取り組み、モード界に進出する。当初は批判や嘲笑も多かったが、功績は否定しようもなく、女王陛下から二度も勲章をもらい、男性の「ナイト」に相当する「デйм」の称号を与えられた。90年代には英国の「今年のデザイナー」賞も二年連続で受賞し、2006年に三度目の受賞を果たした。ヴィクトリア&アルバート美術館では大々的な回顧展もおこなわれた。となれば、堂々たる「権威」なのだが、デйм・ヴィヴィアン・ウエストウッドは決して保守に回らず、行動や発言で世間を騒がせ続け、近年はむしろ環境保護のための活動をしたり、企業の広告・宣伝を批判したり、緑の党を応援したりするエネルギーあふれる活動家としての勇姿がニュースをにぎわしている。戦車に乗って首相官邸に抗議に行ってしまうほど、70代後半になろうとも「落ち着く」気配はない。



このドキュメンタリーでは、そんなヴィヴィアンをとりまく生々しい現実が描かれる。二度目の夫、マルコム・マクラレンがヴィヴィアンの成功をねたみ、足を引っ張り続けていたこと。経済状態が一時破綻していたこと。批評家がこきおろし、テレビの聴衆があざ笑い続けてきたこと。コントロールできていない社内事情があること。現在は社会活動に忙しいヴィヴィアンに代わり、三人目の夫であるアンドレアス・クロンターラー(25歳年下で、元教え子)が主にコレクションを担っていること。こんなことまで赤裸々に公表して大丈夫なのかと観ているほうはハラハラする。

同時に、ぬるま湯の安定に決して収まろうとせず、批判や嘲笑は意に介さず、他人や社会のせいにはせず、困難から逃げず、不器用に立ち向かいながら自分本位を貫くヴィヴィアンの潔さと若さに、魅了され、勇気づけられていることに気づく。

バンクの始祖、ファッションデザイナー、ビジネスウーマン、社会活動家、シングルマザー、25歳下の夫をもつ妻。そして一人の女性。たくさんの「顔」をもつヴィヴィアンだが、その行動の芯にある哲学は1970年代から変わらず一貫している。

まずは、Do It Yourself. 自分で考え、自分のやり方で行うということ。そして、Destroy to Create. 現実には不満があれば、それを破壊し、破壊しながら新しいものを創り出すということ。これからも、彼女は成熟など素知らぬ顔で、その時その時に新しく生まれる自分の感覚に正直に、やりたいことを全部やっていくのだろう。既成の人生

ルートのどこかに収まるはずがないのである。

イアン・ケリーが著したヴィヴィアン・ウエストウッド伝のなかに、ヴィヴィアンのこんな言葉が紹介されている。「私がファッションに携わる唯一の理由は、『conformity(みんなと同じ)』という言葉を撲滅するためよ」。ヘアピンの位置まで「みんなと同じ」リクルートスーツを着て無表情に歩く20歳そこそこの「若者」の集団を目にしたら、ヴィヴィアンにはどのような破壊&創作欲が湧いてくるだろう。

さて、映画のクライマックスでは、これまでのショウのハイライトがたたみかけるように映し出される。私が昨年ロンドンコレクションのフロントロウで間近に見たヴィヴィアンの姿もあった。モデルの一人に肩車されて登場したヴィヴィアンは、思ったよりも小柄だったが、瞬間を最大限に生きている人の歓喜に輝いていた。ヴィヴィアンに感化された観客が大歓声を浴びせ、そんな観客のエネルギーも巻き込んで神がかったヴィヴィアンに鳥肌が立ったものだった。数多くのコレクションにおいて、ヴィヴィアンは一度たりとも同じ服を着ておらず、一度たりとも同じイメージがなく、いつだって過激で、観客を落ち着かない気持ちにさせる。ただただ圧倒的な熱狂で観客を高揚させ、これが本気で生きている人間の姿なのだと思わせるのである。

「ファッション」への関心云々に関わらず、ヴィヴィアン・ウエストウッドという人の存在そのもの、生き方そのものに、観客は魅了されるはずである。私がファッション史に情熱を持ち続けられるのもまさにこんな人との出会いがあるからにほかならない。